

三河アララギ

2025年 令和7年8月 葉月
はづき

八 月 号

第七十二卷 第八号



ニューヨーク日記(226) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

NIÑO GORDO?

Blue Shoe Diaries



マイアミに新しくできた話題のレストラン、Niño Gordo（ニーニョ・ゴルド）。ブエノスアイレス発の人気店です。マイアミにはアルゼンチン料理のお店はたくさんあるけれど、だいたいアサードとか、イタリアン寄りの料理が多い印象。でもここはまさかのアジアメニュー！最初は「コンセプト勝負のお店かな？」と思いつつも、好奇心に負けて行ってみたら…びっくり、ちゃんと美味しい。別に本格派を名乗っているわけでもないし、むしろアルゼンチンのシェフが自由にアジア料理を解釈した感じ。その遊び心満載のメニューと、しっかりした調理技術のバランスが絶妙。写真の牛カツサンドは、アルゼンチン定番のステーキ「ピフェ・デ・チョリソ」を使っていて、ほんのりトンカツソースが塗られてる。ちゃんと美味しいじゃない！

There's a new buzzworthy spot in Miami: **Niño Gordo**, originally from Buenos Aires. While Argentine restaurants aren't rare here, they're usually focused on asado, milanesa, or Italian-influenced dishes. But Niño Gordo brings something different to the table—an Asian-inspired menu, filtered through an Argentine lens. At first glance, it felt a little gimmicky. But curiosity won out—and I'm glad it did. The food isn't strictly authentic (and doesn't try to be), but it's playful and skillfully executed. Take this **gyukatsu sando**, for example: made with bife de chorizo, a classic Argentine steak cut, lightly fried and topped with a delicate brush of tonkatsu sauce. A fun, unexpected blend that actually works.

目次

第七十二卷第八号(通卷八六〇号)

表紙・連 (1)

ニューヨーク日記(226) Blue Stone(2)

歌集 わが冬葵 御津 磯夫(4)

歌集「草々」 今泉 米子(5)

ははきくさⅢ 大須賀寿恵(6)

三河アララギ歌集Ⅲ 夏目 勝弘(7)

『歌集 八千代』 岡本八千代(8)

生命 今泉 由利(10)

守衛さん 安藤 和代(12)

蒟蒻の芽 山口千恵子(14)

ラブレター 杉浦恵美子(16)

夏模様 伊藤 忠男(18)

庭中改修(その十五) 白井 信昭(20)

永遠の 矢崎 直人(22)

『「こよせ」 いーはとぎ』

稲吉 友江(24)

鈴木美耶子(24)

牧原 正枝(25)

森 厚子(25)

水野 絹子(26)

牧原 規恵(26)

大武 智子(27)

現代学生百人一首 東洋大学

中山渚々夏(28)

花輪ひなの(28)

春木 翔伍(28)

永井 澁子(28)

井上 愛心(29)

門田 七架(29)

丸山 賢人(29)

前田 智花(29)

植村 公女(30)

木村 歩歩(30)

今泉 如雲(30)

矢崎 直人(31)

今泉 由利(31)

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集(32)

折々の詩(十八) ふじのけんじ(34)

五感を澄ませば(38) 杉浦恵美子(36)

附録(三十八) 矢崎 直人(38)

『リテラシー』について 中屋 保之(40)

『酔いの徒然』(160) 丸山酔宵子(42)

「スズメがチュンチュン」／

「朝昼晩の「あいさつ」 高橋 育郎(44)

絹の話(177) 今泉 雅勝(46)

「江上浩二の独り言」 江上 浩二(48)

初狩便り45 花野みぷり(50)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣(52)

康鍼治療院 玄翁 (54)

画眉鳥 殿山 木風(56)

Circles of Time Aiyra Hussain(58)

編集室だより 今泉 由利(60)

「三河アララギ」について (62)

歌集 わが冬葵

御津磯夫

松風の音の下よりたちかへる光りとほしくなれる臥處へ

陸奥の赤湯にわれの友ありて香ぐはしきかな保呂羽の餅は

童謠をうたひ手拍子の老もゐてわれの午まへの診療を待つ

露の臺咲けるうへをも縦横に踏んづけながら枯枝はこぶ

生垣をくぐりいで入る毛物けものらは露の臺など踏まざることし

紅梅はややに遅れて並びたつ白枝垂梅しろしだれうめの花薫る寺

午後はやく眼まなこつむりてわが命いくらか伸びむと沈黙をする

庭中の大眞椿に花満てり花ゆらぎつつ甘き露こぼす

黄の色の雪ふり積むといふこゑも晝のねむりの中にきこゆる

ながれゆく雲朱になりて一日のわが仰臥漫吟の鉛筆を投ぐ

歌集 「草々」

今泉米子

朝々の練炭を納屋に持ちにゆく今日よりはまた新しき年

南半球の夏より飛行し來たりたる子は老われの絆纏を着る

育ちたる家の煮染の味を云ふ子らに盛りたる赤繪の鉢も

長椅子にまどろむ夫は目をあきて三浦布美子なら見ねばなるまい

夕あかり少しのびたり北の海の子持ち笹カレイを提げつつ歸る

うどんの歌いく年にしていまぞ食う神谷力の手打ちうどんを

小鳥らの放りし芽生えのカクレミノ庭に出でたるたびごとに見る

萬兩の朱實たのしみをりにしが小鳥ら咋ひて安心をする

北の窓とざしたるままに中庭の同じあたりの朝のうぐひす

一尾つつ食べてしまふは勿體ない今日の夕べも紅梅煮の鮎

はゞきくさⅢ

大須賀寿恵

膝がしら抜けはじめたるパジャマ着て今宵は眠らぬアンカ抱きつつ
与えられし休みは体いたはらむ未だ明るきに床にもぐりぬ

痛む筈なしと云はれしその刻より左の奥歯いたまずなりぬ

ふくらみし葱立ち並ぶ畝の中一株黄色き赤蕪の華

年々に葉の細り来て垣の内の水仙はいつよりか花持たずなりぬ

わが好む屋敷畑の白菜はつぼみ持ちたるままに鋤き返さる

辛子色の絨毯は君より賜ひたるこの六畳に起き臥しをする

安からぬ心持ちて百草にいたみ止め入れ飲みくだしたり

行平のふた持ち上げてふきこぼるる匂ひ香ばし兄の粥焚く

蛇じゃの鬚の細くゆたけき葉群より直ぐ立つラツパ水仙の金

三河アララギ歌集Ⅲ

夏 目 勝 弘

5・1・1と日付印の更埴終へ私の平成四年の終る

曇りゐるガラスを拭ひ明日を見ず干しある足袋を見し人思ふ

降りてくる雪をしばし見上げてをり雪白からず黒き片々

昼神の透れる出湯に浸りをり閉ぢゐる目に帰山先生の御顔

温泉に入りて一日を樂しみたるも二十年ぶりと思へば淋し

地下道に夜を寝ねゐる男等を羨しみ思ふときのありたり

不要書類見分けのつけば一人前と若きと居りぬ寒き倉庫に

春先にわが買ふはスーツならず特製マスクの半ダース

わが鼻ほり止まることなく出でてくる雪解けのごとき透れる滴

上空を巡れるタカのその下に烏は群れつつ鳴き騒ぎ飛ぶ

『歌集 八千代』

蒲郡 岡本八千代

胃の診断うけむと父はただひとり土砂降りの雨の中にいでゆく

胃の手術しなければならぬ父とゐてドクダミの花の夕べま白し

月彰蘭の幾鉢を日向に出しおきて父は入院の車に乗りぬ

父の胃は癌かも知れぬといはれたり一日の授業吾は終へたり
ひとひ

待宵草かたまりて咲くひとところ父の病室よりわれは見てゐき

蕾なりし白百合ひとつ死に近きわが父に向ひてひらき初めつ

終業式終へし今宵より付添はむたちまち父の意識なくなる

父の手帳に震へし文字にて記しあり「腹切レバ自然ト癒リマスク」

握りても握りかへさぬわが父の両手を尚も握りしめゐる

うす赤きサンテ目薬もさしてあげぬ意識のまたもかへるかと思ひて

粥に浮くひと粒の飯を吐き出しし父をわがままとわれは叱りき

父の部屋に父の遺体の置かれつつ竹の葉をりをり窓に触れるる

竹の葉かげ映れる窓のひとつありて今宵より母の独り寝るなり

「島かげにとまれる漁火の」わが歌が父の手帳に記してありぬ

こぼるるばかりに咲きさかり来し姫萩の鉢を亡き父の仏前におく

生命

東京 今泉 由利

物質が最初の生命となりしこといったい何が起ったのでしよう

数千億の恒星の集団の片隅あたり私の地球はあるといふ

地球なる2億年の毎周期銀河系を一周するといふことを

名付きゐる二〇〇万種以上の生物の現生存中と地球にあり

太陽の誕生から四十六億年経過して私の命の生きて太陽

生命の誕生から約四十億年私もしっかり連なりてゐる

地球なる内部の磁場の存在に生命のゆりかごのあるといふを

その名前しつかり付きをり二百万種の命たずさえる地球を見下ろす

二十三億年前地球全球凍結をくり返し六億年にして多細胞生物誕生といふ

さまざまな生物一挙に出現し「カンブリア大爆発」ありき

4億年前陸地にあがったと言う脊椎動物と両生類と

ジュラ紀後期（1億5000万年前）ブラキオサウルス、竜脚類体長28メートルと

人類の誕生は数百万年前のこと地球の歴史の最近のこと

こんなことあんなこと、天文学的月日の過ぎて今を清々生きゐることを

ほのかなる地球の丸みを眺めつつ一万メートル上空にゐる

守衛さん

豊川 安藤 和代

明けやらぬホームの屋根に鳥一羽誰れ待ちいるや心の痛む

衣を替えし朝あしたの風はすがすがし何か佳き事ありそうな今日

朝の窓チワワに夏の服着せて散歩の人行く畑中の道

来年もホームの庭の花見会約束しよう葉桜の下

「生くる」とは誰れも真剣ブロックの小さき透き間に小さき草生く

石巻も本宮山も夏の顔吾れも夏色ブラウス ラ、ラ、ラ、

形よくひきつめられしブロックのホームの庭に降る青葉雨

梅雨空に芋つるをさす人の見ゆかの日の父を偲ぶ午後の日

悲しみも短歌に詠めば心には小さけれども花の咲きくる

花の名を問えば草取る手をとむる守衛さんいて風はさわやか

芝刈機音高らかに守衛さん今日の陽差しよ柔らかにふれ

目鏡してマスクもつけて守衛さん庭木消毒夕迫る庭

草も木も動づ事なき静けさありて梅雨入りとなる

行儀よく食したつもりのお卓に米粒二つ吾れを呼びおり

沖縄は梅雨明けしたと告ぐラジオ庭の紫陽花今盛りなり

蒟蒻の芽

豊川 山口千恵子

思ひゐし処より少しずれしところ蒟蒻の芽出づる斑模様

ガードレールに添ひつつ今年も咲きてゐる黄色あざやか大キンゲイギクは

厚き折込広告取りよけて今日の朝刊のページをめくる

抑留より帰り来し父を物陰より覗き見してゐた幼きわれは

一人生えの枇杷の木になる実十粒ほどを朝々みてゐるその熟れ具合

数少なき父との思ひ出のその一つ山の畑に枇杷もぎしこと

濃紫と淡紫の花菖蒲早や咲き終へ梅雨の日々逝く

早や根付く植ゑ田の早苗の青き色梅雨の晴れ間の風に吹かるる

キャベツの若き葉すべて喰ひ尽くし傍の杭にさなぎとなりぬる

案内もこはずかずか上りくるきつと息子だ今日は土曜日

わが愚痴をさりげなくかはし子は立ち上がるあゝこれで少し心は晴るる

エアコンの掃除手早くして行きぬ梅雨明け未だの暑き日々

広げたる仄かに香る青梅に梅干し作らむ今日の梅仕事

たちまちに赤き梅酢に変はりゆくもみたる紫蘇を塩漬けの梅に

終戦を迎えたドラマの今日のシーン幼なかりしわれにもかすかな記憶

ラブレター

蒲郡 杉浦恵美子

出し抜けにフランチェスカ云ふこの近く祖母出生地アルトカゼルターノ
果てしなき大地に幾つも丘の村この一つなる祖母のふるさと

おばあちゃん村唯一の大学生遠くの駅に毎朝徒歩にて

おばあちゃん毎朝駅に通ふうち恋に落ちたり駅員さんに

ラブレター想ひの文を寄すれども相手は朴訥駅員さん

女子大生毎朝恋文寄越せども駅員偶にぼつんと返信

この恋はやがて露見し駅員の父猛反対と語り草とか

何故ならば村唯一の女子大生昔気質には思ひも及ばぬ

されど相思の意志強ければ駅員の父不同意を二度と言はざり

駅員と女子大生の恋文はフランチエスカが何故か保管す

祖父祖母の百年前の恋文をフランチエスカがそっくり持つてる

ナポリの北遺跡散らばる平原の小さな恋を孫が愛蔵

快晴のアルトカゼルターノひた走るBGMに小さな恋話

祖母先に逝きて鰥夫のおじいちゃん独り暮らしが何十年

おそらくはラブレターをばおじいちゃんフランチエスカに遺したるかど

夏模様

大阪 伊藤忠男

大空に浮かぶ青葉が彩りを夏の初めの森は美し

青い空白い雲湧き照り付ける日差しに問うは何月なるや

水無月の半ばなるにも夏模様日傘なしには外歩かれぬ

春あるや無しかに梅雨も駆け足で厳し日差しは連日のこと

団扇手に縁台将棋楽しむは浮世のことか死語になりけり

夕立が凶器になりて久しきや激し雷雨に逃げまどいたる

夕焼けの時すぎ空に星の降る浴衣に下駄音無しが寂しや

織姫と彦星会えるその想い今は昔の昔なりけり

ロマンスの生まれる空は遠きかなスマホでライン味気なしなり

しよげかえる線香花火どうなのか孫に声かけ断れたり

涼しさを求めきよろきよろあちこちら無駄とは知りつあたり見回す

かき氷スイカにそうめん缶ビール想いは尽きない夏空の下

新緑も空き缶空き瓶あちこちら芝生の汚れ心痛むや

大賀ハス植えて花咲きその日来る古代の声に耳傾ける

我が悟り大切なるもの目に見えず心の奥の奥深くあり

庭中改修(その十五)

豊川 白井 信昭

川よりか吹きくる風の庭中は初夏の陽気精を出しおり

嵩上げの盛土雨に崩れてはその場凌ぎしのに当てがい直す

側溝沿そっこうぞい内側狭くしてコンクリ支柱掘り出し終えり

今一度植え直さんと百日紅さるすべりハコマキの他移ほかし替えゆく

裏道の側溝沿にて土と石台車に分けて運び込む車庫

擁壁の土盛り高く紅色の斑入ふいり皐月さつき一つ咲きつぐ六月

庭路を白く彩る鉄砲百合プランター一つ今花盛り

移し替えて擁壁の上に紅へくれないの斑入皐月三つ咲き揃いをり

咲きつげる皐月に続き植え替えし薔薇額紫陽花悉く開く

浜近く潮に錆さびやすき支柱管立上前のペンキ塗替

四月より学童保育孫匠小学校隣われ駐めずらし

ランドセル背負う孫をば見たしとも妻と迎へにコンビニまでを

囲の奥作業しやすく開け口と豆板二段取り外したり

庭中に雪柳・ジャスミン移し後枯あとらさぬ様に水遣忘やりれじ

側溝沿三メートルほどようやく夏ばら至近く今日解体終えぬ

永遠の

埼玉 矢崎 直人

孔雀鳴く久伊豆神社夏祓赤と青との風鈴が鳴る

若松の孔雀の羽根の目に似たり雄の孔雀の勇壯の羽根

やさしさにふれる夏越大祓神事に足を運ぶ面々

永遠のいのち連なる祝詞かな茅の輪を潜る和歌を唱えて

水無月の白いういろう小豆載せ和菓子に長寿の願いを込めて

入れ忘れたベランダに傘取り行けば二重の虹が目の前かかり

あと一日行けばお休みそのことが一日勤務励む励まし

超勤に超勤をつけ梅雨曇常勤なれば超勤もある

梅雨に入る社会福祉士入る名刺名刺を持つに学ばなければ

夜勤明け介護すまいる館に行き福祉用具をすこやかプラザ

ひとつきが長く感じる一日がその一日が仕事の新た

いまはただ流れるやうに受けとめて流れのままに流れるままに

納車したアルトに乗ってイオンまで走ってはみる焦げ茶のアルト

梅雨に入る焦りは移る焦る程未熟な私の心を映して

俳句にも歯切れの悪い時のあるそれも私の俳句だとみる

『いじよよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

夕間暮れ青田の中のドライブは蛙の合唱とほく近くに

稲吉友江

小夜中にふと目を醒ませば聞こえる恋猫おまへも夜をさ迷へるか
母の日けふ施設に持ちゆく花一輪じつと見詰めて小さき笑みを

今や子供の存在も花の意味も分からなくなった母。昔好きだった花に思わず反応し、心とんでくれてほっこり。

窓の辺の春雨見つっ今日はゐる短歌仲間とホテル竹島

鈴木美耶子

窓越しのけふる竹島春の雨ひとつ浮かびぬ師との思ひ出

春雨にけふる竹島眺めつつ仲間と語らふ語らひ尽きぬ

短歌勉強会を離れ、仲間と食事するのは久しぶり。今回、思いがけず賜りました賞を祝って下さり、感謝です。

四つ辻は店集まりし人寄りしシャッター前に今信号待ち

牧原正枝

人行きて人来たりしの電車どき自転車こぎし朝夕の道は

高校を卒業したよと孫くるる「好きそうだから」と国語便覧

高校で使った副読本をおみやげと孫からもらい、六十年前の西浦の町の様子を思い出したりしました。

深海にタカアシガニと紛ふごと重機三機が吾が町真中

森厚子

校庭にタカアシガニのゐる如く西浦学園建設すすむ

小中の初の合同運動会明日できるか雲行き怪し

八王子神社からの海とタカアシガニのいる眺めに目を見張りました。この光景は、忘れることはないでしょう。

明日はないポップで嘆く朽ちバナナ救ふは我とつい手にしたり

水野 絹子

戸隠の空突き抜ける石階段我を越しゆくはバブル期の子か

妙高の雪にも負けぬま白なる水芭蕉咲く春浅き池

上田の青果市場に寄った際、片隅に積まれたバナナのポップ広告の文言に惹かれ、つい購入してしまいました。

わが畑の瓶に棲みたるへびゐしにいつの間にやら小ガエルのゐる

牧原 規恵

母の日は食事の仕度解放されわれ最高の癒しの一日

月一度長く続きゐる今日女子会気心知れたる話は尽きぬ

七十九歳、気楽な隠居生活を送っているはずでしたが、今だに主婦業から解放されない毎日を過ごしています。

山法師の四、五本ほどが咲き盛るゆきずりの道公民館過ぐ

大 武 智 子

梅雨の日の一日小暗く暮れゆけりアガパンサスの残影のこし

リトアニアリネンの帽子ラベンダーの色を選びて千畝を偲ぶ

七月六日、豊橋の新しい高層ビル、em CAMPUSで開催されたリトアニアフェアに行ってきました。

現代学生百人一首

東洋大学

十六の僕らの翅はひしゃげてる好きも嫌いも言えず震えて

仙台市立仙台高等学校1年 佐藤 文菜

通学路目立たないけど地面にも毎日変わる楽しさがある

宮城県仙台二華中学校1年 及川 颯

免許取り初心者マークの兄と行く右をむいたら父の面影

宮城県名取高等学校2年 横山 実優

鳥海の涼しき風にあおがれるテントの中に登山部眠る

秋田県立秋田北高等学校1年 櫻庭 幸登

オムレツはふわふわよりも薄皮派部活帰りの私を包む

秋田県立秋田西高等学校3年 利部 瑠南

流行語若者「それな」祖母「んだず」祖母が使うとめんこいばかり

山形県立新庄神室産業高等学校真室川校1年 荒木 英美梨

祖父の編む葡萄の蔓で出来た籠裏地縫う祖母躍るぬい針

山形県立新庄神室産業高等学校真室川校1年 櫻本 唯

手に持った鑷子の冷たさ身にしみるこれから見てゆく命の尊さ

山形県立山辺高等学校1年 漆山 璃海

『俳句』

大西瓜チャイルドシートに居座れり
水打って小さき虹の中に入る
振り向けば母いる安堵盆の月

植村公女

中東の戦火を停めて梅雨明けに
世の中の憂いを飲んで牛蛙
門扉開き月下を走る蜥蜴かな
母娘来て薄紅映える合歡の花
夏空にアポロンの馬車ルドンの夢

木村歩歩

キャッチャーは虎ノ介君雲の峰
ここからは非電化路線青芒
鈴蘭や置物の鶴亀蛙

今泉如雲

孔雀鳴く久伊豆神社夏祓

矢崎直人

永遠に連なる茅の輪くぐりかな
やさしさにふれる夏越大祓

若松の孔雀の羽根の目に似たり
干した傘入れるの忘れ見ゆる虹

懐かしき草原にして土筆なし

今泉由利

四段目の花も咲きそむ仏の座

サフランの雄蕊色してパエリヤ

草むらに瑠璃色見付く犬のふぐり

一木^{ぼく}を尽して白し花木蓮

千年の時を経にけり春絵巻

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

曇天や吾がふるさとは梅雨に入り

木風

紫陽花や何ぞ目をひく雨に濡れ

観音も自裁あわれむ桜桃忌

白南風に窓あけはなち昼寝かな

白南風が黒髪なぶる渚あり

尾長鳥カラス追いはらい山笑う

紀風

トランプやテスラ売却飛行機で

柏もち葉ばのかおり楽しみに

武道館微結で望むコンクール

散歩道木洩日多し一休み

春近くクマの足跡街の中

山火事か阿蘇の野焼は虫退治

スマホ持ち携帯電話は目ざましに

どくだみの白き花びら庭を占め

友と見た名月院の紫陽花や

菖蒲湯や豊かな香り手足伸び

桜見て浮かぬ心が竹林に

山田よし乃

紀山

折々の詩(十八)

ふじのけんじ

八月六日

通勤の道で 自転車に乗りながら
ふと空を見る

声が聞こえる
いつてらっしゃい 気をつけてね
お弁当わすれないでね
今日も暑いですね
もうすぐお盆だね

あの日も ありふれた夏の朝だったのだろう

目の前を二人の子供が 手をつないで歩いている
肩に水筒をつりさげて
子供たちの姿が ふとあの時に重なる

襟足を きれいに切り揃えていた
後ろ姿に
生をもぎ取られた 人たちの
あの日を生きて語り続けた人たちの
言葉が 浮かび上がる

何ということのない一日の
なんとしあわせなことよ

今日は ずっと空を見ていよう
あふれていたであろう あの日の
声を聞きながら

いつてらっしゃい
お弁当わすれないですよ
おはようございます
暑いですね

(八十年目の八月六日、九日に、そしてすべての戦没者に捧げる)

五感を澄ませば (38) 杉浦恵美子

おひろ

以前「百人一首」の半分近くは恋の歌であったと書きました。それもそのはず、王朝時代は和歌のやり取りがすなわち恋、ひいては和歌の巧拙が恋の行方を左右したほど。

時代は下って武家社会、表向きには恋の歌など軟弱と切り捨てられたことでしょう。

そして近代、どんな恋の歌が？

当時としては画期的な恋の歌を詠んだ与謝野晶子が筆頭に挙げられるでしょうが、彼女については別の機会に譲り、今回は斎藤茂吉の歌集『赤光』所収の「おひろ」に見られる恋について考察してみようと思います。

かの有名な「死にたまふ母」全59首に続く連作44首です。

ところで『赤光(しゃっこう)』とは、

大正2(1913)年10月に刊行された斎藤茂吉の処女

歌集。そのロマンチズムあふれる清新な歌風によって歌壇・文壇に大きな影響を与え、一躍著者の名を高からしめた。茂吉のもっとも代表的な歌集とされ、明治38(1905)年〜大正2(1913)年にかけての創作が収録されている。

刊行当時茂吉は31歳であり、東大教室および巢鴨病院にて医師としてつとめていた。生母・いくと師・伊藤左千夫を相次いで喪った直後に出された。「悲報来」「おひろ」「死にたまふ母」といった著名な一連は同書に収められている。

さて「おひろ」とは、この連作に詠まれた女性で、茂吉の若い頃の恋愛相手でしたが、この恋は成就しませんでした。

彼女について茂吉自身は生涯語らなかつたのですが、その後の調べで、

「おひろ」のモデルは、茂吉が青山病院の書生であったときの茂吉づけの女中「福田こと」であったことが判明。浅草の写真館の娘でした。

ふたりは深い関係になります。しかしそれが養父の斎藤紀一に知られ、ことは女中を誠になつてしまいます。

茂吉は、養父が学費援助、さらに娘輝子の婿養子に予定されていたため、悲恋に終わる宿命でした。だからこそどの歌も切々と迫ってきます。

それにしても、若い書生に専任の若い女中？恋愛するなという方が無理な気がします。

「おひろ」から幾つか拾ってみましょう。

夜くればさ夜床に寝しかなしかる面わも今は無しも小床も

はつはつに触れし子なればわが心今は斑らに嘆きたるなれ

放り投げし風呂敷包ひろひ持ち抱きてゐたりさびしくてならぬ

しんしんと雪ふりし夜にその指のあな冷たよと言ひて寄りしか

あはれる女の臉恋ひ撫でてその夜ほとほとわれは死にけり

「死にたまふ母」も、4部からなる、無駄のない構成、各歌の緊迫感などさすがの傑作と思いますが、「おひろ」もふたりの悲恋を言葉に結実させた作品として、読み継がれているものでしょう。

ところで、「おひろ」と別れた後、茂吉は彼女と再会したことが、「屋上の石」連作（初版『赤光』所収）から読み取れます。この時彼女は信州に嫁いでいたらしく、別れて後も彼女に会いに行く茂吉のダイナミックな行動力に驚嘆するとともに、東京出身の彼女がどんな縁あつてか、地方へ嫁いで行った宿命に痛ましいものを感じます。

しら玉の憂のをんな恋ひたづね幾やま越えて来りけらしも

ところで斎藤茂吉は、伊藤左千夫に師事し、アララギ派の中心人物として活躍しました。『赤光』巻末に「この巻（明治38〜大正2、足かけ9年、833首）は偶然にも伊藤左千夫先生から初めて教をうけた頃より先生に死なれた時までの作になっている」とあり、特に『赤光』によってアララギ派が一世を風靡していたことをも改めて感じました。

茂吉歌を愛唱すれば和らげり我も与る三河アララギ

附 録 (三十八)

矢 崎 直 人

孔雀鳴く久伊豆神社夏祓

岩槻の久伊豆神社には、毎年六月三十日に夏越大祓の神事が行われます。この神社には、孔雀がいます。赤と青の風鈴が沢山並んでいて、孔雀の絵が描かれています。孔雀は邪気を払う力があるとされその音色は梅雨の晴間の暑さを杜に清涼な風を呼びこんでいます。

孔雀鳴く久伊豆神社夏祓赤と青との風鈴が鳴る

永遠に連なる茅の輪くぐりかな

禰宜の後ろに続いて行事に参加される方々と共に「水無月の夏越の祓する人は千歳の命延ぶといふなり」と唱えながら茅の輪くぐりをしました。歩くことと唱えることが一体となって、神話に語られた物語を再現する行事に続

けられてきた一つ一つのいのちにまた、新たな時が追加されていくことを感じます。素朴ないのちを大事に続いていくことへの願い。それは、いまここで行われる体験が昔から続いていて、また続けていかれることへの願いなのではないでしょうか。

お土産にいろいろに小豆を載せた「水無月」という和菓子を買って帰りました。

永遠のいのち連なる祝詞かな茅の輪を潜る和歌を唱えて

干した傘入れるの忘れ見ゆる虹

ベランダに干していた傘。雨が降り始めても入れるの忘れていました。雨が止んだあとに思い出して取りに行きました。すると目の前には虹が出ていました。よく見ると二重虹。外側の虹は薄くてすぐに消えてしまいましたが、良かったです。

入れ忘れたベランダに傘取り行けば二重の虹が目の前かかり

『リテラシー』について

中屋保之

『リテラシー』という言葉を初めて耳にしたのは、かれこれ三十年ほど前であつたらうか。ワープロからパソコンへと移行しつつあつた当時、「本格的なネット時代を迎えるにあたって、利用する者たちはリテラシーの力量が問われる」との指摘する声があつた、と記憶している。さほど先見の明があつた訳でもないのだが、昨今の事例を見聞きするにつけ『リテラシー』の重要性、大切さを痛感する。今では「○○リテラシー」と、例えば「情報リテラシー」「メディアリテラシー」「金融リテラシー」などと広義に亘っている。特に重要性が高まっているのが「ITリテラシー」だと言われている。ものの本によると、『リテラシー』とは、あくまで知識とスキルを指す言葉で、そこに「正しさ」や「善・悪」の概念は含まれないとの事。まさに現在問題になっている悪しきネット上での風潮の根源では? ネット上での動画をはじめ、大量の情報が瞬時に飛び交う今の時代、「読み書きの能力」に加えて、話す言葉の能力を備える「訓練」が重要と言えるのではないか。

ウィキペディア (Wikipedia) では、『リテラシー』とは原義では「読解記述力」を指し、転じて現代では「(何らかのカタチで表現されたものを)適切に理解・解釈・分析し、改めて記述・表現する」という意味に使われるようになり、日本語の「識字率」と同じ意味で用いられている。ちなみに、古典的には「書き言葉を正しく読んだり

書いたりできる能力」と言う限定的に用いられる時代もあった。元々は「書き言葉を、作法に。かなったやりかたで、読んだり書いたりできる能力」を指していた用語《だそうである》。

我々の想像以上のスピードで進化（と言えるのかどうかは別として）し続けている「ネット社会」に於いて、その「訓練」がおざなりされてきた咎めが顕在化しているように思える。特に、国の根幹を担うべき政治家たちのリテラシー能力の乏しさは洋の東西を問わず目に余る、と感じるのは私ひとりではあるまい。

ネットを利用する者たちのリテラシー力を高めるためにも、改めて『モラル』を思いたい。『モラル』とは「道徳・倫理」という意味である。行動の「正しさ」や「善・悪」に焦点を当て、一般的に社会生活において守るべきルールや規範、個人の良心などを指す。テレビ・ラジオ・新聞・雑誌・WEBサイトといったメディアから発信される情報を、適切に活用するスキルを養い、各メディアの特徴や違いを理解したうえで、必要な情報を見極める、そして、多くの情報の中から目的に合ったものを取捨選択し、嘘や間違った内容を排除し正確で信頼できる情報を見つけ出し、適切に活用する。知識とスキルを指す『リテラシー』と行動の「正しさ」や「善・悪」に焦点を当てている『モラル』を確りと理解した上での情報発信であって欲しい。

今年もまた、八月や 六日九日 十五日がやってきました。この時期だからなおのこと、強くそう願う。

『酔いの徒然』（二六〇） 丸山 酔宵子

『ミスターの思い出』

6月3日、ヴェネチアからドーハ経由で18時間。

午後7時ごろ鬱陶しい湿気の多い梅雨空の成田に着いて、やっと目黒八雲の自宅に戻ったのは午後10時過ぎであった。

荷物の整理は後回しにして、まずは10日ぶりのお風呂につかり、パジャマに着替え、久々にサッポロ黒ラベル小瓶を開けて、テレビを点けてみると、「長嶋名誉監督が肺炎で亡くなった！」のニュースである。横に座っている妻に聞いてみると、「エーッ、知らなかったの！ 今日今朝、号外も出たのよ。もうとつくに、ネットで見てるかと思つたは・・・」とそつけない。

小学校高学年の頃に、立教大学の長嶋を知り、巨人に入団、開幕戦で当時の国鉄スワローズ（現ヤクルト）の金田正一投手から4打席連続三振も白黒テレビで見ても今でもはつきりその姿を覚えている。

中学生になってからは当時横浜に住んでいたの、後楽園は遠く、川崎球場は当時の大洋ホエールズ（現DeNA横浜ベイスターズ）のフランチャイズ球場で、よく巨人戦が行われ、京浜急行で選手たちの守備練習や打撃練習を身近にみるため、昼過ぎから弁当持ちで見に行ったものである。

ある巨人戦終了後、どのように入ったか、今でも不明であるが、バックネット裏の記者インタビュースペースに忍び込んで、長嶋の記者インタビューの様子を目の当たりにしたのである。

憧れの長嶋選手が目の前に立っていて、その当時150センチほどであったので、179センチの長嶋は聳え立っているようだった。色が限りなく白く、胸毛がユニフォームからちよつと出ていてひと際輝いていた姿を今でも思い出す。

中学では勿論、野球部に入り3番サードを目指すのであるが、運動神経も野球センスも上手のライバル同級生にポジションを取られ、外野で何とかレギュラーを維持した次第である。しかし、長嶋への憧れというか憧憬は変わらず、ロッカーは3番、入場口は3番口、くじ引きは3番と、何でも「3」を選んでいたのである。

それから40年の歳月が経過し、長嶋が1975年「巨人は永遠に不滅です！」を最後に現役引退し、巨人の監督になるが、残念ながら大いなる挫折を味わうことになるのである。

その後、野球人を離れ、文化人(?) になって、「ヘーイー!カール!」などオリンピックのレポーターなどを勤めていたが、13年の浪人生活後、1993年巨人監督として復帰してきたのである。

1996年、最大11.5差をひっくり返し優勝したペナントレースを長嶋が「メイクドラマ」と表現したのである。

その当時、世田谷九品仏に住んでいて、度々環状8号線にある「田園調布サウナ」(現在は無い)によく通っていて、週末とか、海外出張の後とか、家も近いこともあって、良く通っていた。

11月のある平日、ヨーロッパから出張後「田園調布サウナ」に行ったのである。いつものように、先ずサウナにとバスタオルを片手に大浴場に行くと、平日であるとはいえ、お客は全く皆無なのである。それではと、ゆっ

くりとサウナのドアを開けると、大柄な色白の大柄な紳士が一人静かに座っているのである。

土・日はぎゅうぎゅう詰めのサウナがガラガラの状態で一瞬たじろいでしまったが、よく見ると、「我が憧れの!長嶋さん!」であったのだ。

長嶋と気づいた瞬間、「監督!メーク・ドラマ!おめでとうございます!」と、やや緊張気味でお声を掛けたところ、あの独特な高い調子の声で、「ヤーツ、どうもどうも・・・」

矢張り、異常な存在感とオーラは、バスタオルだけのお互い真つ裸でも、ひしひしと感じたのである。

その後も、「田園調布サウナ」でもお会いすることがあったが、最後はホテルオークラでの洋画家絹谷幸二のパーティーでタキシード姿の長嶋さんにお会いし、ご挨拶したのであるが、その1ヶ月後、脳梗塞で倒れてしまったのである。

ミスターの訃報を知るや走り梅雨

酔宵子

スズメが チュンチュン

高橋育郎

スズメが チュンチュン

早起き鳥だ

コケコッコーの ニワトリも

どちらが早いか 五分と五分

朝の歌を 歌います

ツバメは スイスイ

早い ハヤイ

高めに飛ぶとき 明日は晴れだ

低めに飛ぶとき 明日は雨だ

軒端の巣には 赤ちゃん可愛い

ハトは 平和のシンボルだ

豆がすきな ハトなんだ

人の足元 寄ってきて

豆のごちそう よろこぶよ

ハトが飛びたつ 拍手をしよう

カラスは カアカア

夕焼け小焼け

山のお寺の 鐘が鳴る

カラスといっしょに かえりましょう

それでは元気で またあした

朝昼晩の ごあいさつ

高橋 育郎

朝はおはよう コケコッコ

夕焼け空は 真っ赤か

早起き鳥の ニワトリさん

カラスはねぐらに 帰ります

今日も元気で 行きましょう

僕らもいつしよに かえりましょう

卵を産みます 待っててね

昼はこんちわ チュンチュンチュン

スズメは歌が 好きなんだ

三時のおやつ お昼寝しましょう

元気いっぱい 飛びまわる

夕べはカアカア こんばんは。

絹の話 (177)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

相撲すまい節会せちえと七夕祭たなばたり

相撲の始まり

相撲の始まりは、日本にはまだ文字の無い神話時代に出雲地方で製鉄をしていたヤマタノオロチと言われる集団を成敗（素戔嗚尊）して、尾から出てきた「草薙の剣」で蝦夷を討ったといわれる日本武尊（やまとたけるのみこと）の祖父の垂仁天皇（紀元前 69〜西暦70年）の時代に遡ります。

この頃中国では秦の万里の長城や墳墓建設の重労働や長江地方への遠征、焚書坑儒などの圧政を逃れ、4、000万人の1/3強の人口が各地に逃散していました。

特に朝鮮半島には土木建設、素焼きの兵馬備造り、絹織物、紙すき、冶金などの職能集団が南下して来ていました。その中に中国で墳墓の素焼きの埋葬物を作っていた集団の一部が日本の山陰地方に移り住んでいて、その長に「野見宿禰」という体の大きな力持ちがいました。同じ様に大和に「当麻蹶速」という力持ちがいて、自分

にかなう者はいないと豪語していました。その両者の話が垂仁天皇の耳に入り、天皇の前で相撲をとる事になり、両者が戦い、野見宿禰が当麻蹶速を踏み殺して勝利し、天皇から土師氏と言う姓を賜り、大和土地を下賜され、宮中では秋の豊穰を祈願する節供には相撲が奉納される様になりました。これが天覧相撲の始まりです。

土師はじ氏の隆盛

その後土師氏は朝廷の土器かわぶなどの御用を務め、葬送の儀礼などにも携わって栄達の道を歩んで行きます。

時代が進むと土師氏や秦氏（中国からの渡来民）の万里の長城建設仕込みの土木技術は日本の古墳時代を招来し、巨大な墳墓を建設するかたわら、天皇の崩御時の殉死に変わって埴輪を作る事を推奨し、各地の豪族の委嘱も受け、土師氏の力は全国に広がって行きました。同時に儒教や道教、天文学などが中国からもたらされ、土師氏は学問の道に力を注ぎ、宮中の要職を務め、奈良時代に続いて行きます。

日本の七夕祭りの導入

奈良時代の遣隋使によつて中国から七夕しちせきの祭りが日本にもたらされました。当時の七夕の祭りは今日の様に竹の葉に短冊を吊るして楽しむ様なものではなく、星の位

置から季節を正確に知り、陽である奇数の重なるめでたい日に（道教、陰陽道）、天皇が秋の豊穰と国家安寧を神に祈願する儀式を執り行う日でした。

大和政権は大宝律令で絹の官服の着用を義務付けましたので、絹の需要が高まっていました。国内では中国の貴族が着用している蟬の翼の様に薄く霧の様に柔らかい布を織る技術がありませんでした。

当時の中国では絹が国に大きな富をもたらす基幹産業でしたので、乞巧奠（きこうまんとん）という手芸上達を祈願する民間の祭りと合体して、天の川を挟んでアルタイとベガが横に並ぶ7月7日の夕方、禊をした織女が神殿にあがって、春蚕で採れた新布とそれを織った柵機（たなばた）を神前に供え、季節を知り、殖産興業を計る神聖な神事としての祭りでした。

この行事は日本には渡りに船で、絹の増産を計る国家行事として導入され、相撲節会は7月7から日延されてしまいました。聖武天皇時代までは盛に行われていました。しかし平清盛など武士が力を持つ様になると天覧相撲は廃止されてしまいました。

その後の土師氏

土師氏は古墳時代が過ぎると埴輪などの需要が減退して行ゆきました。政務に励み、奈良時代末期に桓武天皇から改姓を認められ、菅原、秋篠、大枝（平安期に大

江に改姓）といった姓を賜りました。菅原家は特に学問に道に秀で、平安時代初期には菅原道真が学問の神様となり、天神様として祀られる様になりました。

土師氏と秦氏

土師氏と秦氏は中国の秦（しん）を逃れて朝鮮半島経由で日本に土着した人達で、渡来時期や渡来地も紀元前後から4世紀にかけて北九州から山陰に多く渡来しました。土師氏も秦氏のグループの多様な職能集団の一団です。

特に秦氏の中で活躍するのが絹の職能集団です。5世紀の雄略天皇の時代に大量の絹を献上して、太秦（うづまさ）（麻佐）の称号を賜り、その地が現在の京都の地名になっています。その後秦氏は羽田、畑、島、波多などから長田、長曾我部、川勝、赤松、松下などと広がってゆきます。現在の西陣の人達にも受け継がれています。

七夕を「たなばた」と読むのは無理がある

水辺の畔に建てられた機織り小屋（神聖な場所）の柵機（たなばた）に感謝し、さらに織物の上達を神に祈願する祭りは7月7日の天の川が見えて来る夕方行われるので、いつしか七夕祭りと書かれる様になりました。

「江上浩二の独り言」 92 江上浩二

田端文士村の講談社初代社主野間清治と社員柳瀬清

私は結婚後、家内の実家がある北区田端に住み始めた。私の年代・世代（昭和28年の巳年）では大学受験前は所謂大学封鎖や安田講堂封鎖等々の学生運動が血気盛んな状況で、そんな中でも、誰も文学青年ではないのだが、私も理系を目指していた一高校生ではあったが、坂口安吾、井伏鱒二、太宰治、織田作之助や教科書に出てくる作家の森鷗外・夏目漱石・正岡子規・寺田寅彦・芥川龍之介などの名を上げられる程度のちっぽけなものであった。大学入学後、江藤淳に少しはまったが、それは文士というより、当時古墳や遺跡発掘が漸く始まって、古代史や萬葉集の方に私の興味は向きかけたのは20代前半の事であった。

さて、これから田端（芸術村）文士村に関連する私から見た小さな発見や意外なことについて、飛び飛びに

なってしまう時系列的な出来事について呟きたい。田端文士村なんてあったのか、を世に知らしめたのはJR田端駅前に田端文士村記念館が再開発プロジェクト事業の一つとして建設されてからの事、1993年11月（平成5年）。私が田端に移り住んでから15年が過ぎていた。当時は私の長男が通い始めた地元の中学校の校歌が文士村の一員室生犀星によって書かれたものであることだけはよく知っていた。また文化勲章の荣誉に称えられた、陶芸家の板谷波山や柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺の句を詠んだ正岡子規のお墓がある大龍寺は自宅前の道を挟んだ至近距離にあったのだ。

芸術関係の方々は上野にある今の東京芸大の関係者がひとりふたりと芸大までの地の利が良いという理由で移り住むようになって、芥川龍之介の3歳年上で1889年生の室生犀星は北原白秋を慕い、石川県の同郷の高等小学校で一緒だった芸術家吉田三郎（板谷波山の弟子）を頼って1917年（大正6年）に田端の借家に、大学入学前という年齢は若いのだが芥川龍之介は家族とともに1914年（大正3年）下町から山の手の地に移り住

んで来た。また芥川は板谷波山の友人で鑄金家の香取秀真と関わり、初期の頃は陶芸家の板谷波山が中心であったことが分かった。

注・田端文士村のHPには芸術家・文士が誰の勧めで田端に移り住むことになった背景説明まで記されていて、貴重な情報となっている。例として板谷波山の勧めで、益子焼の名を世に広く知らしめた濱田庄司（民藝運動を推進）も昭和3年から暫く田端495番地にいた。

田端文士村記念館のHP情報も年とともに充実してきているようで、最近勉強させられたことは、昭和9年に上京し田端608番地にいた五味保義は島木赤彦・土屋文明に師事し、その後戦後のアララギ誌の発行責任者となった歌人。

ここからが8月号の独り事の本題です。前述の通り、充実してきた文士村HPによると、初代講談社の社主・野間氏の名が文士村文士のメンバーとして、野間氏の略歴が記され、田端に別邸を構えていたとあり、当時の社

名は大日本雄辯会講談社、その中核として雑誌雄辯の編集長として抜擢されたのが・やなせ清さん・やなせたかし（アンパンマンで有名な漫画家）の父であった。最近講談社で柳瀬清さんに関する資料が見つかり、講談社の資料センターの公表物を参照させて頂いている。清さんは1921年4月まで、雑誌雄辯の編集長として在籍し、その後清は東京朝日新聞社に引き抜かれて転職し、比較的直ぐに中国へ記者として、家族と共に赴任したとされている。

確かに初代社主の野間氏は田端に別邸を構えていたので田端文士村の一員で、雑誌雄辯の凄腕編集長として活躍した柳瀬清の一家は東京府北豊島郡滝野川町の借家住まいと言う事迄判明した。その滝野川町には大字が複数あって（滝野川、西ヶ原、中里、上中里等々）、その一つが田端、残念かな、その借家の正確な大字は不明で田端でなかったようだ。清も文で立ち文を極めたいという志はあったようだが、それが実を結ぶ前に外地の赴任先で、病で急逝してしまった。33歳であったそうだ。



初狩便り
(45)



花野
み
ぷ
り



稲の花

稲の花を見たことがあるだろうか。初狩で八年、米づくりにしている私でも一回しか見たことがない。仲間たちも今か今かと待ち、機会があることに稲を見つめるが、なかなか出会えない。

八月、田んぼの緑がいよいよ濃くなる立秋の頃、ほんの数時間だけ稲の花は咲く。天気の良い日の午前十二時ごろ、気温は三〇度を超え、空気が乾燥してくると、七ミリほどの殻が二つに割れるように開き、中から雄しべが伸びてくる。雄しべの先端の黄色の袋のなかには花粉がたくさん入っている。雄しべの下の開いた殻のすきまの、もやもやしたのが雌しべで、雌しべは上に向かって細かく枝わかれている。雄しべの袋から花粉がこぼれ落ち、雌しべに花粉がつき、受粉する。花は二時間もしないうちに閉じてしまう。米になるのは雌しべの下にある緑色の部分。受粉すると少しずつふくらんでくる。

こんな小さな命の営みで、おいしい米ができる。なんだか神々しいことと思ってしまう。そして花が咲いてから、だいたい四十五日後、待望の稲刈りとなる。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2025年7月7日

その時期の栄養素

蒸し暑さと気温が上がリ

息苦しくなるような日中です

エアコンを上手に使い

水分補給をしっかりとして

体力を削らないようにしていきましょ

赤しそ 店頭で見なくなつてき

いよいよ終盤になりました

次の季節の スーパーフード は

梅 です

梅といえば 梅酒 ですが

アルコールを入れず つけて

梅シロップにしますと 老若男女関係なく

体内に入れることができます

赤しそ同様で 炭酸で割るのも良いですよ

ヨーグルトにかけたリしても美味し

万能でありながら

今の時期に必要な栄養素を摂取できます

その時期に 必要なものがある

改めて 自然の凄さと昔の方の知恵に

感謝がありません

3S+ゆたぼん+ヨーグルト+八分+湯船

も 引き続きやっていきましょ

今日も笑いながら楽しんで行きます

2025年7月14日

同じ姿勢は…

気温が高いためなのか 植物が元気です

雑草も含めですが笑

雑草といえば 草むしり

草むしりって ついつい夢中になってしまいます

気がつくとい時間たってたなんて さらにですよ

ただ

同じ姿勢で1時間…

身体にとってはかなりの負担です

くわえて

湿度や気温の高い時期の 同じ姿勢の1時間

身体を壊しにいつている といっても過言ではありません

文頭でも書きましたが

温が高い日が続いているので

植物が元気 ということは

かぶれ や 虫などや

アレルギー症状なども要注意です

SS + ゆたぼん + ヨーグルト + 八分 + 湯船

とくに 水分補給 と 八分(ほどほど)に

を意識していきましよう

今日も笑いながら楽しんで行きましよう

康鍼治療院 (www.yasuhari.com)

玄翁

「夏は鹹味かんみが必要で」

鹹味は塩味 腎の味
水を動かす 味覚なり
鹹味の塩分 水に溶け
浸透圧にて 細胞の
水が動いて 身体の
様々生理を維持して

鹹味の塩分 あることで
脳や神経の細胞も
体液 濃度勾配を
利用し 神経動かし
筋肉・内臓・感覚器
身体生理を機能する

鹹味は体温 保持する味
適度な塩分 血液の
水分動かし 濃くする故に

血液 適度に熱持たせ
冬でも夏でも 身体の
内部の体温維持している

塩分濃すぎりや 身体からだでは
水が抜けてき 乾いてき
血圧なども 上がるけど
塩分少なきや 水動かず
冷えて・怠くて 食欲下がり
頭の機能も悪くなる

夏は暑さで 汗かくが
水分多く 摂りすぎりや
身体からだの塩分 少なくなり
体温維持が 弱くなり
身体機能も 落ちていき
だるくて バテる状態となる

夏に元気でいたければ
適度に鹹味を摂取せよ



「尿と汗は陰と陽」

身体の水に 陰陽あり

陽気と水の動きにて

寒熱・陰陽 調節し

時候に適った身体となる

気温が下がる陰の時

夜の寝る時 寒い時

体表冷えて 皮毛閉じ

陽気は内部へ 引っ込んで

身体の水は 陰の部の

内部の下腹 膀胱に

滲み入り 尿溜めて

余分な陰気を 外に出す

日中活動 動く時

気温があがりて 暑い時

身体の陽気が増えるなら

身体の水は 陽の部の

体表・皮毛に滲み出て

汗とし 発散させるにて

陽の旺熱 外逃し

体温 一定に保っている

日中陽の時間にて

汗が出るのは正常で

夜半の陰の時間にて

汗が出るのは異常となる

暑けりや 汗が増えていき

寒けりや 尿が増えていく

汗が多けりや 尿少なく

汗が少なきや 尿増える

汗と尿は陰と陽

夏に冷えれば 尿増えて

汗少なきは 冷え過剰

夏の過冷は 通年の

陽気が奪われ 弱ってく

夏こそ冷えない様にする

これが夏の養生じゃ



画眉鳥がびちよう

殿山木風

頃日頻頻としてけいじつひんびん 囀声てんせいを聞きく

歌うたうが如ごとく高調こうちようは人ひとをして清きよらかしむ

誰たれか言いう正まさに是これ 画眉鳥がびちようならんと

海うみを渡わたり飛とび来きたりて 友ともを呼よんで鳴なく

画眉鳥

令和七年五月

頃日頻頻聞囀聲 如歌高調使人清

誰言正是画眉鳥 渡海飞来呼友鳴

(語釈) 〇画眉鳥：原産地は中国。鳴き声が良い。〇頃日：近頃。〇囀声：鳥のさえずり。

(通釈) (どこで鳴いているのだろうか) 近頃、頻りに鳥の鳴き声を聞く。その鳴き声は歌うようで高調しは人を清らかにしてくれる。誰か(実はスマホで調べた家内が)言うには画眉鳥であると。(それならあの欧陽詢が詠った「画眉鳥」のそれであるか)(晩春になると近年よくこのさえずりを聞いたのだが)海を渡って飛んできて友を呼んで鳴いているのか。

珍しい美声にどんな鳥だろうかと興味津々となった。鳴き出しの始めはウグイスにも似たところがある、が違う。サービス精神旺盛なのだろうか色んな音色が長く続く。家内がスマートフォンを操作してそれは画眉鳥と判明した。しかし、どんな鳥なのかは明確には把握できないでいる。詳しい人が居られる事と思う。何年前か前、栃木で異常に増え鳴き声がうるさいと市民から苦情があったと聞いて、美しい鳴き声なのにと首をひねった。でも、うるさいと言えば、確かに私にも体験が有る。西伊豆の山に囲まれたある家を伺った時、ウグイスが群生し鳴き声がうるさくて仕方が無かった事を思い出した。「ホーホケキョ」と個の声が聞こえて情緒があるものだとは思う。彼の鳥は我が家の近くを一羽で飛び回っているようだ。

大体、鳥が鳴くのは縄張りを宣言するのか、仲間か雌を呼ぶ為に決まっている。と云うわけで家内がスマートフォンで探し出した鳴き声を、遠くで鳴いている其れに向かって音を出すと庭先にやってきて鳴きだした。「ほら、あれよ!」面白いものだと思った。近頃鳴き声を聞いたら、嫁さんは見つかったのだろうかと家内共々心配をしている。

画眉鳥のしきりに鳴くに窓を開け

Buddhist Theravada text, and the Jataka tales mention the fruit. In the 16th century, Emperor Akbar established an orchard of 100,000 mango trees in Bihar, making use of grafting techniques that had been developed by the Portuguese when they first encountered mangoes in Goa. The great Mughal's orchard has not survived. But the billionaire Mukesh Ambani has developed an extensive orchard in contemporary India.

As my own nameless Goan mango testifies, the mango's appeal transcends royal pomp and extraordinary wealth. Of thousand kinds of mangoes in India, which produces 50% of the world's mangoes, only two dozen have commercial value.

When I did cut open the mango given to me years ago in Goa, all I could do was marvel in nature's bounty and its wild, irrepressible diversity sustained by unnamed people as much as by kings and billionaires. Human kind's long engagement with nature, with trees and with the earth that longs to sustain us, for me is one small comfort in these brutal days of inhuman starvation.

時の輪廻

マンゴーの季節：売るために／味わうために

私にとって最高のマンゴー体験は、もはや夢にさえ見られないものです。それはゴアのマンゴーでした。インドにある推定 1,000 種のうち、ゴア産の 100 種類に絞られます。その特徴的な黄色から、2024 年まで州外には出回らなかつたマンクラッドという品種だったのかも知れません。

最も印象的だったのは、その果実を手のひらに載せていた男性のこと。5 人でどうやってこの小さなマンゴーを分けようかと考えていた私を、彼の情熱が包み込みました。その実は、彼の家の木から採れたものだと言いました。彼が生まれてからずっと知っている木、彼がその傍らで遊ぶよりも前から家族が大切に育ててきた木。「これはゴアで一番のマンゴーだ」と彼は誇らしげに語り、それを摘んで私たちのもとにやってきたのです。

果実のあたたかさは彼の言葉のぬくもりそのもので、私の中の凝り固まった思考をほぐしてくれました。私の想像力は、祖父が毎年夏にマンゴーを丁寧に選び、均一に熟れるように並べていた記憶の範囲を超えたことがありませんでした。けれど、そのゴアのマンゴーを切り開き、太陽のぬくもりをまだ残す果肉を味わった瞬間、その甘酸っぱさが、私の中の地域的な思い込みを覆したのです。

南アジアでおおよそ 4,000 年前に野生から始まったマンゴーは、今やそれ自身が歴史的存在といってもいいほどです。初期の仏教テキスト、上座部仏教の寓話にはマンゴーが登場し、『ジャータカ物語』にもその名が見られます。16 世紀には、ムガル皇帝アクバルがビハールに 10 万本のマンゴーの果樹園を造りました。当時ポルトガル人がゴアでマンゴーと出会い、開発した接ぎ木の技術が活かされたといえます。アクバルの果樹園は今では残っていませんが、現代インドでは億万長者ムケシュ・アンバニが広大な果樹園を所有しています。

けれど、私が味わった名もなきゴアのマンゴーが証明するように、マンゴーの魅力は王の威光や巨万の富をも超えて届くのです。世界のマンゴーの 50% を生産するインドには 1,000 種以上ありますが、市場で流通するのはそのうちたった二十数種にすぎません。

あのときゴアで受け取ったマンゴーを切り開いた私は、ただただ自然の恵みと、名もなき人々にも王にも富豪にも育てられてきた、その野性で抑えがたい多様性に驚嘆するばかりでした。人類が自然と、木々と、そして私たちを養おうとする大地と関わり続けてきたこと——それが、非人道的な飢餓が続くこの過酷な日々の中で、私にとってのささやかな慰めなのです。

Circles of Time

Atiya Hussain

Mango Season: For sale/For Enjoyment



Source: *Mangifera indica*, Sopan Joshi
(Aleph Book Company, 2024)

My peak mango experience is one I cannot even dream of revisiting. It was a Goan mango, which does narrow down the possibilities to some 100 varieties out of an estimated 1,000 types of Indian mangoes. It was a characteristic yellow that could well have been a mankurad, a variety Goans kept to themselves until 2024 when it was first sold outside the state.

Most memorable was the man who carried the fruit in his palm. His enthusiasm distracted me as I considered how to share the smallish mango among five people. The fruit, he said, was from his familial tree, a tree he had known his whole life, a tree that his family had cared for even before he played beside it. It was, he said, the best mango in Goa, and he had plucked it just before making his way to us.

The warmth of the fruit echoed the warmth of his words, disrupting an internal commentary that ran along narrow, familiar lines. My imagination had never hurdled possibilities beyond childhood memories of the care with which my grandfather selected and stored mangoes every summer to ensure they ripened evenly. When I cut open the Goan mango, still warm from the sun, the very first taste of the sweet-tart flesh overturned my regional preconceptions.

Starting from wild beginnings in southern Asia some 4,000 years ago, the mango is practically an important historical figure in its own right. A mango-referenced allegory is part of an early

編集室だより【二〇二五年八月】

今泉 由利

歌集「地球にて」

向い風強き旅所橋渡りゆく鶯にひかれて亀戸天神

温室にぬくぬく南国の植物ありパラグワイブラジルアルゼンチン思う

鯉節の濃く匂いだつだし汁をまず作るなり日本住いとなりて

打ち寄せし波のなごりの線幾つ残りいて太平洋の引潮の刻

昆布の根の太き二つを杖にして波の間に間の濡るる砂浜

われ知りし音して海苔の乾きゆく細き道あり房総にきて

玉砂利を歩み来りて二休み辛夷の蕾のその木の下に

ゆつくりと夕暮れてゆく畦道にペンペン草は背高くなりぬ

幼子の雨靴に二ひら付いている何処に咲きしかこの桜花

今脱ぎたるコートより散る二三片桜並木を通りきたりて

ピントはカラスの巣作りに合わせてあり子供の部屋の望遠鏡は

大粒の汗流すこともせぬままに昼餉の肉の大き一片

白々と白浮びくる夕暮に届きましたよどくだみの花束

川風も夕立もよろしき駒形橋きよう水無月のむぎとろとろの料理

江戸時代伝うる如く音たつる吹きしガラスのまろまろ風鈴

ほろほろと昨日咲きたる花は落つ屋久萩の小さき鉢

ロスアンゼルスに赤く彩りいし百日紅いま東京に咲き散る百日紅

夕餉にはよめな御飯にしようかな踏み分けてゆくよめなの群生

露草ツルシヤナと名付けし眼科病院ありアルゼンチンのブエノスアイレス

まつすぐに白き貝殻並べゆく幼子はあのことこのこと話し続けて

人工の味付けされし物に慣れ今日は噛み噛む木の実椎の実

三の輪より王子を過ぎて面影橋今日まだのこる都電と共に

銀杏の成らない公孫樹の大木の近くに私の家見つねぬ

干し終えし体操着スケート着の間より見ゆる御苑は冬の木々枝々

甘泉園巡りめぐりて花尽し栝榴紫陽花沙羅小紫式部

赤く変る一葉拾いぬ大鳥袖を染むるといふシャリンバイ

アララギ一位オンコと良き名をもちている赤き木の実をわれつ摘む

背のびして小さく一枝折りとりぬかやの実かやの実まだまだ若い

子供等はタコス食みおりメキシコ風私は茄子に三河の味噌を

ミンミンの蟬鳴きしきるその下に新井白石終焉の標

抜け殻のあたり静けし油蟬の飛びゆくまでをひととき見守る

目覚めにはミンミン蟬のかしましき御苑の側の窓開け放つ

駅へ行く人等の歩みに揺れているエノコロの穂を私も揺らす

幼くて御津の野山に遊びし頃ナンバンキセルには出逢はざりしを

蔓に黒き小粒の芋の光沢よ神宮外苑は零余子の季節

自転車の荷籠の中で音立ててどんぐり踊る昨日拾いし

どんぐりのまた落ち敷ける所ありゆうべ私の窓打ちし風

八重二重濃さも淡きも木槿木槿田無の町の友の病院

梧桐の実を手のひらにころがして外苑橋のまん中あたり

散り敷ける小粒はつやつや濃き樺色椎の木の下椎の実のとき

木通色あけびの木通を売りいる果物屋まだその味を知らざるままに

拾い来し椎の実たちまち食卓に並べて朝の食事となりぬ

一条の線光りてナメクジの天井を行くを良しとしており

緑より淡紫へつぎて濃き紫移りゆくなり小紫式部

栝榴の実の色付く日溜り喜びて人を待つ間のたちまちに過ぐ

燈火色のめだち来たりぬ烏瓜ま白き花の日より待ちいて

熱きまで背に受けている秋の陽よ日本に住むは何時までならむ

間もなく建築始まる様子あり赤のまんまの群れいるビルの間

豆フエジョウを煮る処方フエジョウはポルトガル語にてルイスは唯に豆フエジョウを食みつつ

蛸型の風つ増えて住み続く千駄ヶ谷五丁目フエジョウの真白きビルに

「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三・四五・三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ 090・8434・8646
TEL 03・6765・5838
- ◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>
E-mail imayurizm@gmail.com
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。
- ◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。
- ◇会費制は廃止。
- ◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。
- ◇令和七年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。
- ◇編集・発行 今泉由利